

■（１７２）６９年の時と津波被害でますます難くなる戦災の伝承

震災被災地に緑の雑草が生い茂る。いまだに土地のかさ上げ工事は始まらず、暮らしの再建は見えてこない。そんな岩手県釜石市の斜面に小さなトンネルが姿を現した。震災前は住宅裏に隠れていたが、建物が津波に流され、脇の国道から確認できるようになった。

釜石は太平洋戦争末期の６９年前、連合軍から艦砲射撃を受けた。翌日に北海道・室蘭、その２日後に茨城・日立、２週間後に静岡・浜松、そして長崎に原爆が落とされた日に再び釜石が戦艦から砲弾を浴びせられた。飛んでくる砲弾から住民や学徒動員の生徒、敵の捕虜が身を守るために逃げ込んだのが、釜石の製鉄所が掘った小さなトンネルだった。そのトンネルが復興のかさ上げ工事で土砂に埋められてしまうのではと、市民団体や住民が懸念した。だが、心配無用だった。「復旧＝原状回復」という役所の原則に救われた。トンネルの前は土砂が積まれず、そのまま残す計画に。結果的に「保存」されることになった。

被災地では被弾跡が残る建物や戦災資料も津波に流された。戦争体験世代も多数が犠牲になった。時の流れに加え、震災で、「過去」の伝承がますます難しくなっている。(山)